オリバー・ストーン　基地の島 OKINAWAを語る

琉球新報創刊120年事業

克明な戦争描写に評価

社会に問う 米政府、経済…

ベトナム戦争を題材にした映画「プラトーン」などで米アカデミー監督賞を2度受賞したオリバー・ストーン監督が8月、沖縄を訪れる。講演会「琉球新報創刊120年記念　オリバー・ストーン　基地の島　OKINAWAを語る」に登壇するほか、沖縄の米軍基地の実情を視察する。世界的に影響力を持つストーン監督が沖縄の状況を知り、発言することに対し、県内の映画関係者や識者、経済界からも期待の声が上がっている。講演会は8月14日午後7時、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで。ピーター・カズニック氏（米アメリカン大学教授）、大田昌秀氏（元県知事、沖縄国際平和研究所主宰）、乗松聡子氏（ピースフィロソフィーセンター代表）も登壇する。

オリバー・ストーン監督の作品は「プラトーン」に代表されるように、兵士としてベトナム戦争を生き抜いた体験を生かし、戦争とは何かを問う作品で国際的に知られる。米国政府や政治、経済の在り方に批判的な視点を提示する作品も多く、社会派としての評価は揺るがない。一方で登場人物の人間くささや善悪で割り切れないリアルさなど、脚本への評価も高く、日本でもファンは多い。

1974年にホラー映画「邪悪の女王」で長編監督デビューを果たした。78年の「ミッドナイト・エクスプレス」でアカデミー賞の脚色賞を受賞した。

86年の「プラトーン」はベトナム戦争を米陸軍偵察隊員として戦った自身の体験を基に撮影した。米軍が無抵抗の民間人を虐殺したり、部隊内での麻薬汚染や殺人など、戦場での人間の醜さや残酷さに焦点を当て、戦争がいかに非人道的なものであるかを克明に描いた。勧善懲悪の物語や、英雄が登場する戦争映画とは一線を画すこの映画で、ストーンは監督と脚本を務めた。

出演はチャーリー・シーン、ウィレム・デフォー、トム・ベレンジャー、ジョニー・デップら。米国内では賛否両論を巻き起こしたが、ベトナム戦争の内実を初めて克明に描いたと国際的に高い評価を受け、アカデミー賞の作品賞、監督賞、編集賞、録音賞に輝くなど一躍脚光を浴びた。

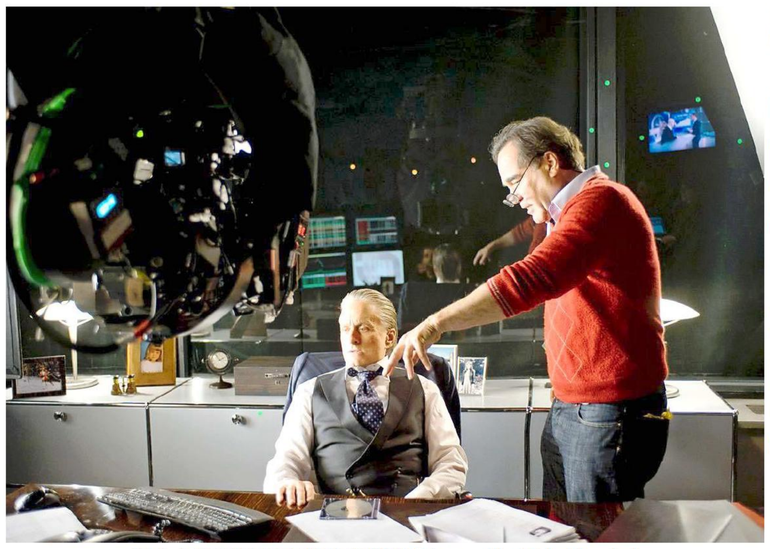
さらに89年には、一人のベトナム帰還兵の生涯をトム・クルーズの主演で描いた「7月4日に生まれて」を作った。この作品でもアカデミー賞の監督賞、編集賞を受賞している。

そのほかにも、エルサルバドル内戦を題材とするリチャード・ボイルの小説を映画化した「サルバドル/遥かなる日々」(86年)、若手証券マンと投資銀行家のドラマを描き、実際のウォール街にも影響を与えた「ウォール街」(87年)と続編の「ウォール・ストリート」(2010年)、ケネディ大統領暗殺に関わるクレイ・ショー裁判を題材に、独自説に基づいて暗殺の内幕を描き、アカデミー賞の撮影賞、編集賞を受けた「JFK」(1991年)などがある。

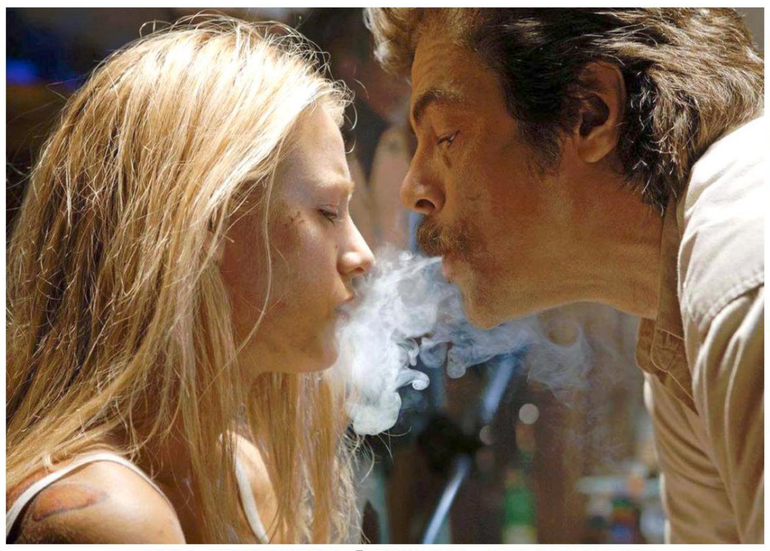
最近はドキュメンタリーを通じて米国の現代史を問い直す作業に没頭している。映像作品の製作にとどまらず、執筆活動にも積極的に取り組んでいる。

オリバー・ストーン氏　1946年、米ニューヨーク生まれ。ベトナム戦争から帰還後、ニューヨーク大学で映画製作を学び、74年に監督デビュー。86年の『プラトーン』、89年『7月4日に生まれて』でアカデミー賞監督賞を受賞した。米国の戦後史の裏面に光を当てたドキュメンタリー番組『もうひとつのアメリカ史』が脚光を浴びている。

ベトナム戦争の内実を克明に描き、世界的評価を受けた「プラトーン」



資本主義経済の在り方を問う「ウォール・ストリート」



最新作、2012年公開の「野蛮な奴ら／SAVAGES」

沖縄題材に映画撮って

映画監督・真喜屋力氏に聞く

オリバー・ストーン監督の来県を前に、県出身の映画監督・真喜屋力さんにストーン監督の魅力や、沖縄を訪れることへの期待感について聞いた。

―オリバー・ストーン監督の映画はどうか。

「『プラトーン』を学生のころに見て、印象に残っている。当時、似たような映画が多く作られたが、違う手触りみたいなものがあり、心が動かされた。スティーブン・スピルバーグにも似たようなところがあるが、反戦という姿勢はあるにしても、戦争を描く時にアンチだけでなく愛憎がある。矛盾みたいなものが前面に出てくるのが、好きな一番の理由。単純な反戦映画ではない。戦争はよくないという建前ではなく、その中を生きた人間が言うことだから、賛否両論はあるが嫌いになれない。ベトナムから帰ってきて何もできず、うろうろしていた時にできた脚本だと聞く。どうしても作らないと監督自身が駄目になっていたであろう、表現者としての強い思いを感じる映画だ」

―戦場からの帰還者が日常に戻るのは困難と聞く。

「ベトナムだけの話ではない。沖縄のお年寄りが戦争の心的外傷後ストレス障害(PTSD)で苦しんでいるという話が最近になって出てきたが、尋常ならざる状況を生き延びている。戦争がいいか悪いかという大前提より、戦争が起こってしまったら終わりだ。戦場は相手を殺さない限り生き残れない。何が正しいかということを戦場で話してもしょうがない。だから起こらないようにしなければならないし、戦争した時点で人生が駄目になってしまうと感じさせられた」

―描き方が一面的でない。

「彼は戦場で南部の黒人から『肌の色の違う友人がいっぱいできたことが良かった』と振り返っている。人間的なつながりも描いた上で戦争を描いた。物語として身に迫ってくる形で。登場人物の善と悪がきっちり割り切れないからこそ、生き生きとしている。ベトナム人を撃ち殺すような悪人の方が、戦場で生き残ろうと思えば頼りがいのある人なのだろう。戦場を疑似体験できる面白さがある。ヒーローがいなかったのもいいところだ。敵のこともよく分からないまま、ぐだぐだと死んでいく。最後は逃げて終わり。実際に米軍は負けた。あの時代にこれを撮れたのはすごい」

オリバー・ストーン監督について「沖縄に来たことをネタにして面白い映画を撮ってほしい」と語る真喜屋力さん＝那覇市の桜坂劇場

「沖縄戦体験者の高齢化で語り継ぐことがどんどん難しくなる今、彼の話を聞いてみたいと思っていた。生き死にを経てきた人の考えることを聞きたい。不思議だが、戦争に行った人の言葉が実は平和的だ。ぎりぎりまで戦いたくないということの表れだろう」

―映画監督としてストーン作品に感じるものは。

「現場が好きなんだと思う。誇大妄想っぽいところはあるが、現場の部隊がお上と戦う話が好きなんだろう。社会的な意味は別として、映画として反骨のドラマがあるのがいい。娯楽として生きている。社会性と娯楽性のバランスがいい」

―来県で期待する点は。

「いい言い方じゃないかもしれないが、今回のことをネタにして面白い映画を撮ってほしい。本を書くのもいいが、やっぱり映画が見たい。映画として面白いのはもちろん、考えさせられたり、僕ら自身がはっとさせられるような。日本と米国という大きな視点で描くかもしれないが。ベトナム戦争にも沖縄は深い関係がある。たとえ沖縄の人がむっとするような内容になってもいいと思う。彼ならではの視点で、新しいものを見せてほしい」

（聞き手・宮城隆尋）

◇　◇

まきや・つとむ　1966年那覇市出身。琉球大卒。92年に映画「パイナップルツアーズ」で監督デビュー。東京で約10年間、演出家やテレビの仕事に携わる。2004年に日台合作アニメ「アークエとガッチンポー」を監督。05年に桜坂劇場の設立に携わり、プログラムディレクターなどを務める。11年5月からフリー。

佐藤学・沖縄国際大学教授

米国に現状伝える突破口

オリバー・ストーン監督はベトナム戦争から政治、経済まで米国をテーマに幅広く映画を撮ってきた著名な監督だ。伝える力がある人が沖縄の現状について話をしてくれることは大きな意味がある。民主主義からみておかしなことが起きているのが沖縄だ。

人権、権利、平等の問題で沖縄の主張が曲げられており、米国も加担しているという訴えをストーン監督が受け入れないわけはないだろう。沖縄で見聞きし感じたことを米国で伝えてもらえば、これまでにない展開を望めるのではないか。

本来、人権の問題に敏感でなければならない立場であるオバマ米大統領に沖縄の声が届かないわけがない。伝わっていないのが実情だろう。何かが劇的に変わることにはならないかもしれないが、現在がこれだけ厳しいだけに、沖縄の現状を米国に知ってもらう突破口になることを期待したい。

（政治学）

照屋義実・県民大会共同代表

米国が変わるきっかけに

世界的に影響力のある方を通して、県民の声が広く伝われば大きな意義がある。米軍普天間飛行場へのオスプレイ配備については県民大会を開き、東京行動もした。県内首長や議会など総出での取り組みだったが、日本政府は何も動いていない。それどころか、8月上旬にも追加配備される。

県民の声を無視したもので、怒りを通り越して…というのが多くの共通の気持ちだろう。

宮森小米軍機墜落事故の証言を基に製作した映画「ひまわり」を成功させる県民の会で副会長を務めた。この映画を見て初めて沖縄の歴史や厳しい現実を認識したという若者が多かった。現実を知らないことが行動しない要因だとすれば、今回の監督の来県がきっかけになり、米政府や米国民が沖縄の現状を見ることができ、何かが変わる力につながってほしい。

（オスプレイ配備に反対する県民大会実行委共同代表、県商工会連合会長）

親川志奈子・「オキスタ107」共同代表

自らの言葉で米に伝えて

高校生の時に米国ルイジアナ州に留学した。沖縄で起こり続けている米兵による暴行事件をはじめ、米軍基地問題について伝えようと学校の友人や先生たちに話したが、誰一人として「沖縄」を知らないことにがくぜんとした。

沖縄戦のことも、「基地の島」沖縄のことも、アメリカ人はほとんど知らない。入隊するのは先住民族や黒人や貧しい人たちが中心で、自分とは関係のない問題だと「普通のアメリカ人」は感じているのだろう。私はウチナーンチュとして、私たちの歴史やウチナーグチを次世代へ語り伝えることを意識している。ベトナム戦争に従軍した経験を持つオリバー・ストーン監督には、沖縄からベトナム戦争を見てほしい。

「悪魔の島」と呼ばれた沖縄での米兵の存在、米軍基地を68年間背負わされている沖縄の現状をアメリカ人として、自らの言葉でアメリカ人に伝えてほしい。

（「オキスタ107」共同代表）

チケット購入方法

【前売り券販売場所】琉球新報社（本社、泉崎ビル、中部支社、北部支社）、ファミリーマート（イープラス）、ローソン（Lコード：88109）、ジュンク堂書店那覇店、戸田書店豊見城店、球陽堂書房（那覇メインプレイス店、西原シティ店）、桜坂劇場

【問い合わせ】琉球新報社事業局☎098(865)5200